

Infolettre de l'AJEQ

Association japonaise des études québécoises

日本ケベック学会ニュースレター

2024 年 大会特集号

第 14 巻第 1 号 (通算 38 号)

2025 年 7 月 19 日発行

2024年度 全国大会特集号

第 15 回全国大会総括：

2024 年度 AJEQ 全国大会を振り返って
真田 桂子 (阪南大学)

2024 年 10 月 5 日、爽やかな秋晴れの日に、AJEQ 全国大会がモントリオールの姉妹都市である広島で開催された。開催校の広島大学の荒木会員のご尽力により、広島市中心部にある東千田キャンパスの広々とした教室を会場として、30 数名の参加者が集い充実した大会となった。

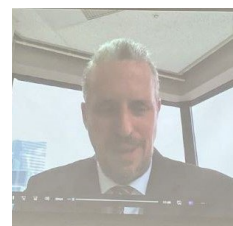
今年度は、伊達会員のご協力により、ゲストスピーカーとして、カナダ・シェルブルック大学のダヴィッド・クッサンス教授をお迎えし、基調講演とシンポジウムはケベックにおけるライシテをテーマに行われた。また、韓国ケベック学会 (ACEQ) からはパク・ヒテ氏が参加された。

大石会員の開会の辞に続き、ケベック州府在日事務所代表のシェニエ・ラサル氏による大会の成功を祈念するビデオ・メッセージが流された。開催校代表としての荒木会員の挨拶に引き続き、当日やむを得ない事情により欠席された丹羽会長からのメッセージを関副会長が代読された。

●本号の内容●

巻頭言 (真田桂子) … 1 全国大会各セッション報告… 3

大会の詳しい内容については、各セッションの司会担当者の方々による報告を参照されたいが、大会をざっと概観すると、午前の部の自由論題では、スティーブ・コルベイユ会員が、Drawn & Quarterly 社から創刊されたケベックのアンダーグラウンド・コミックの前衛性についてフランス語で報告を行い、西川葉澄会員は、飄々とした文体のうちに日本文学をあたかも自らのオルタナティブな表象であるかのように描くラフェリエールの独自性についての分析を行った。それに引き続き、パク・ヒテ氏はフランス語による発表で、アイスホッケーに代表されるスポーツとケベックのナショナリズムの関係について検証を行った。



開会式 (左上から時計回りに、開会の辞を述べられた大石会員、シェニエ・ラサル・ケベック州府在日事務所代表、開催校代表の荒木会員)

午後の部では、クサンス氏が、これまでのケベックのライシテ研究に欠けていた視点を喚起し新しい動向を示唆する基調講演を行い、それに対して入念に準備された丹羽会長のコメントが読み上げられた。続いて飯笹会員、矢内会員、伊達会員をパネラーとするシンポジウムが開かれ、飯笹会員は、内向し保守化するケベック・ナショナリズムを背景に「開かれた」ライシテの右傾化とインターカルチュラリズムの変質に警鐘を鳴らし、矢内会員は教会とフェミニズムの関係を中心に交差する権力関係の視点から問いかけた。そして伊達会員は、ケベックと日本社会との比較研究の視点から、言語、主権、平和といった主要な概念を切り口に、岐路に立つ今日のライシテのあり方を総合的に検証した。新しく会員となられた田中浩喜氏による手際のよい司会進行によって 各々の報告に対する質疑応答では、それぞれの視点から刺激的な問いかけがなされ、考察がさらに深められた。

ランチタイムには、佐々木菜緒会員と真田が「姉妹都市、モントリオールと広島、その交流の軌跡～1998 年から 2024 年まで」と題したセッションを企画し、姉妹都市締結以後の両市のこれまでの交流の軌跡を、毎年、広島で開催される *Journée de Montréal* での市民参加の様子をスライドにしてまとめて報告した。またケベックを代表する劇作家ロベール・ルパージュが、原爆の惨禍に見舞われながら不死鳥のように復興した広島に感銘を受けて創作した大作「Hiroshima,

太田川、七つの流れ」についても紹介した。

本大会では、自由論題、シンポジウムとそれぞれに独立した研究発表でありながら、ケベック・ナショナリズムの変遷、ケベック文化の前衛性、ケベックと日本との繋がりなどのテーマが、期せずして有機的に結びつき、コンパクトでありながらこれまでの大会にもまして、深く考察を巡らすことができた大会となった感がある。

また大会の終了後には、ルパージュの作品に共鳴するかのように、惨禍からの再生の歩みを象徴する広島原水爆被団協が、今年のノーベル平和賞を受賞したという嬉しいニュースも飛び込んできた。このように、広島で行われた **AJEQ** 全国大会は、保守反動に揺れ動くグローバル世界において、独自の立ち位置を模索しようとしている今日のケベック社会を照らし出す有意義な大会となった。

(日本ケベック学会理事)



<各セッション報告>

2024 年度全国大会は、ケベック州在日事務所代表シェニエ・ラ＝サール氏、開催校より荒木会員、そして丹羽会長のご挨拶(関理事による代読)に始まり、自由論題、ミニ企画、基調講演およびシンポジウムで活発

な議論が繰り広げられました。以下は、それぞれの司会者・報告者からの報告です。

自由論題セッション・前半

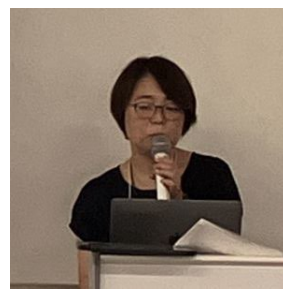
司会：村石 麻子（福岡大学）

自由論題においては、漫画・小説からスポーツまで、ケベック文化が多角的に分析され、その豊かさが浮き彫りになる発表であった。

まずはスティーブ・コルベイク会員により、1989 年モントリオール創業のコミック専門出版社 Drawn & Quarterly の挑戦についての発表があった。社会問題を抉り出す野心的な作品群の中でもジュリー・ドゥセの代表作『Maxiplotte (plotte は女性器を表す隠語)』に焦点を当て、その挑発的な作風の意図が考察された。作者の目的は、精神病や薬物依存、自傷、性転換など様々なタブーに切り込み、女性のセクシュアリティを赤裸々に表現することで、ジェンダーに対する根強い先入観を打破することにある。また、酒に酔うと英語が自然に出てくるという描写があるなど、性的偏見の批判のみならず、英仏言語闘争の問題に絡めた社会風刺もあり、その射程範囲は広い。会場からは、ケベック内外での評価・受容、対象となる読者層、デジタル版の販売など出版戦略に関わる質問があった。

次に西川葉澄会員により、ダニー・ラフェリエールにおける三島由紀夫の影響についての発表があった。漱石の代表作タイトルのパロディである『吾輩は日本作家であ

る』では、三島は堅物の官僚という日本人のステレオタイプとして滑稽に描かれ、また割腹自殺はカリスマ的ロックスターの見世物として皮肉なまでに戯画化されている。その一方、少年期に耽読した三島作品は、国家や民族、文化の違いを超えた普遍的なアイデンティティの探求を先鋭化させるきっかけを作家に与えている。はたしてラフェリエールにとって三島は、そうした作品哲学に決定的な影響を及ぼした作家として特権的な地位にあるのか、それとも百科事典的な網羅主義・バベル的銜学趣味の一環として、星の数ほどいる世界の文学者の一人にすぎないのか（西川会員の言を借りれば、ブルデューの言う「文化資本」、教養・学識へのマイノリティ作家のこだわりとも言えるだろう）。その答えをめぐって会場では活発な議論が交わされた。



自由論題セッション前半（左上から時計回りに、司会の村石会員、西川会員、コルベイク会員）

自由論題セッション・後半

司会：廣松 勲（法政大学）

自由論題セッションの最終報告では、パク・ヒテ氏（成均館大学）が登壇され、「La représentation du nationalisme québécois dans le sport」と題された研究発表を行った。ケベック社会における“国技”ともいえるアイスホッケーに注目しながら、ケベックにおけるナショナリズムの形成において、スポーツという文化的営為がどのようにかかわってきたのかについて、詳細に分析がなされた。ロラン・バルトがプロレスを分析する際に指摘したように、ケベックにおけるホッケーは一つの「神話」として機能しており、とりわけ民衆とのコミュニケーションをとるための、効果的なプラットフォームとして考えられるとされた。そのような観点から見ると、とりわけ 60 年代の静かな革命期においてホッケーが果たした役割は、単なる娯楽ではなく、ケベックの人々が自らの民族的感情を表明する重要なファクターとして存在していたことが示された。

様々な資料を例示しながら行われた発表は、AJEQ のこれまでの研究活動では余りなかった領域でもあり、スポーツという新たな視点がもたらし得るであろう、ケベック研究の新たな見え方として非常に興味深いものであった。



自由論題セッション後半（左から、司会の廣松副会長、ACEQ からご参加のパク・ヒテ氏）

ミニ企画：

「姉妹都市、モンリオールと広島、その交流の軌跡～1998 から 2024 まで～」

佐々木 菜緒（明治大学）

本大会がモンレアルの姉妹都市である広島で開催されることになり、この特別な機会に、モンレアルと広島のつながり、交流の軌跡を共有するためのミニ企画が立てられた。真田桂子副会長を中心に準備が進められる中で、広島に縁のある私佐々木がこの企画に加わった。この場を借りて、貴重な資料と情報をくださったケベック州政府在日事務所にお礼を申し上げたい。同企画は「姉妹都市の歩み」と「広島とロベール・ルパージュ」の 2 部で構成された。

前半の「姉妹都市の歩み」は佐々木が担当した。この 2 つの都市の交流は、1986 年広島市長がモンリオール市で開催された「平和と安全に関する国際会議」で講演したときに端を発する。それ以降、代表団の相互訪問や、平和促進に関わる行事への参加、お互いの植物園を通じて交流がつづき、1998 年に姉妹都市提携調印に至った。現在、モンレアルでは毎年 8 月 6 日に植物園

(Jardin botanique) の日本庭園で平和式典が行われている。広島においては、例年 7 月に開催されている「モンリオールの日」を通じて、モンリオールの紹介やクイズ、ケベックおよびモンレアルの特産品の販売がなされている。さらに、2002 年以降、広島市映像文化ライブラリーにて断続的に「ケベック映画祭」が催されている。普段あまり目にすることのない作品に触れる機会として好評を得ている。

後半の「広島とロベール・ルパージュ」では、原爆の主題を扱ったルパージュの作品『HIROSHIMA 太田川の七つの流れ』について真田副会長が紹介された。周知のとおり、ルパージュは世界的な演出家、劇作家、俳優、映画監督として活躍しており、彼の手がけるものには、最新のテクノロジーを果敢に取り入れた独自の演劇空間がひろがる。神崎舞会員の著書『ロベール・ルパージュとケベック-舞台表象に見る国際性と地域性』(彩流社、2023 年) に詳しいように、『HIROSHIMA 太田川の七つの流れ』は、ルパージュの想像世界において、広島とケベックが出会い、触発され、融合し、稀有の舞台芸術として、世界に向けて発信された記念碑的作品であり、広島とケベックの絆を象徴するといえる。1994 年の初演以来、上演を繰り返しながら更新されるワーク・イン・プログレス形式で場面が増やされ、上映時間 7 時間にも及ぶ超大作となる。世界各国で上演されるものの、日本では 2020 年 Bunkamura での上演予定がコロ

ナ禍により中止となった。今回、短い紹介映像を通じてではあるが、この稀有な作品世界を、広島の会場で共有できたことは感慨深いことである。

今後も、多様な分野でモンレアル (ケベック) と広島 (日本) との交流が深まり、新たな素晴らしい絆が生まれることを願うものである。



ミニ企画における真田副会長と佐々木会員



基調講演

司会：伊達 聖伸 (東京大学)

ケベックにおけるライシテの課題をテーマに掲げた本大会では、ケベックのライシテの専門家で、この大会にうってつけのシェルブルック大学法学部のダヴィド・クサンス (David Koussens) 教授をお招きし、

「ケベックにおけるライシテの思想と思考されざるもの」と題して基調講演をしていただいた。

この20年ほど、ケベックではライシテが政治の舞台や社会において盛んに論じられてきた。「ライシテ」という研究対象は、ケベックの学問の世界では、長いあいだ周縁に留め置かれてきたが、2000年代半ばの「妥当な調整の危機」以来、急速に正当性を獲得することになった。ライシテをテーマとして扱う博士論文や修士論文の数も急増している。しかしながら、クサンス氏は、政治や社会における議論も、学問的研究も、公共空間における宗教的なものの可視性に過度に焦点を当てることになっていると指摘する。物事にはさまざまな面があるので、その特定の側面を特権化することは、別の側面を盲点にしかねない。たとえば、クサンス氏によれば、ケベック高等裁判所が2002年に出した同性婚を認める判決は、結婚のライシテ化のテーマと関係しているが、そのことに注目した研究は極めて少ない。また、コロナ禍の際に州政府は礼拝施設での活動に規制を加える措置を取ったが、信教の自由の制限に関係するこの問題を、現代ケベックにおけるライシテ研究は見逃しているという。ケベック州政府は共和主義的なライシテを推進する立場のギー・ロシェの名に因んだライシテ賞を創設しているが、クサンス氏はケベックのライシテの特徴である調整に関する研究にもっと注目してよいのではと示唆した。

コメンテーターの丹羽卓会長は、あいにくご家庭の都合で会場に来ることができなかったが、コメントおよび質問は田中浩喜会員が代読した。21世紀に入るまでケベックでもカナダでもライシテは前景化していなかったのに、なぜケベックだけが「暗黙のライシテ」から「明白なライシテ」に移行したのか。学問の世界におけるライシテの議論は政治過程とりわけ法案の議論にどのような影響を与えてきたのか。政府の方針を批判する知識人たちの言論は有効に機能していないのか。なぜ公共空間における宗教的可視性だけに議論の焦点が当たることになったのか。

クサンス氏はこれらの質問に対して、フランス社会とケベック社会における議論の同時性、ブシャール＝ティラー報告書の提言が当時の自由党シャレ政権に受け入れられなかったこと、政府系知識人とそれに批判的な知識人の関係は多勢に無勢であること、ライシテを口実として公共空間における宗教的可視性に制限が加えられていることなどに基づいて回答した。

時間は押していたが、会場からも、ライシテ化の度合いを測定する指標やメディアの役割に関する質問が上がり、活発な討論が行なわれた。



司会の伊達会員とダヴィッド・クサンス教授



シンポジウム：

「ケベックにおけるライシテの課題」

司会：田中 浩喜（明治大学）

今年度の全国大会では、シンポジウム「ケベックにおけるライシテの課題」が開催された。青山学院大学の飯笹佐代子会員、長崎大学の矢内琴江会員、東京大学の伊達聖伸会員が登壇し、明治大学の田中が司会を務めた。

飯笹会員は「ケベックにおけるイスラムのヴェールと *interculturalisme*」と題する報告を行った。2019 年の「国家のライシテ法」(21 号法) はしばしば、ケベック・ナショナリズムの矛先が英系カナダからムスリムに移行した結果とされる。だが、飯笹会員はこうした語りを「ポストコロニアルな想像力」の持続という観点から問い直す。飯笹会員によると、国家のライシテ法の支持者たちは、連邦政府のマルチカルチュラリズムを敵視して、それに抵抗するケベックの文化的価値としてライシテを捉えている。すなわち、ライシテは宗教的マイノリティだけでなく、連邦政府に対してもケベックのナショナル・アイデンティティを主張するための理念とされている。20 世紀のケベックを突き動かしていた「ポストコロニアルな想像力」はいまも健在なのである。他方、*interculturalisme* はブシャール＝テ

イラー委員会に一応の定式化をみたものの法制化には至らず、国家のライシテ法が体现する今日のライシテは、多文化に開かれた *interculturalisme* の精神からは程遠いものになっているという。

矢内会員は「クリスチャン・フェミニスト団体とライシテ」と題する報告を行った。カトリックの女性・俗信徒が声をあげるために結成された *L'autre Parole* は、独自の典礼実践や社会問題に関する意見表明を行ってきた団体である。矢内会員によれば、*L'autre Parole* はブシャール＝テイラー委員会の議論を受けて「他者性」「多様性」「アイデンティティ」に関する議論を重ね、2010 年代以降はライシテを特集号で 3 度扱っている。例えば 2021 年の特集号では、ケベックのライシテの性差別構造を解明したメンバーの博士論文が取りあげられており、そこでは男女平等の立場からライシテと女性差別の繋がりを批判する「ラディカル・フェミニスト・ライシテ」というポジションナリティが示されている。このように、女性であると同時にクリスチャンであるというインターセクショナルリティ、そして自らが「他者である」という経験を起点としながら、ライシテに関する主体的で批判的な考察を重ねてきたところに *L'autre Parole* という共同体の特徴があるという。

伊達会員は「ケベックと日本のライシテを比較するためのいくつかの着眼点」と題する報告を行った。伊達会員は、ケベックと日本のライシテを比較するうえで有効な

3 つの論点を示した。ひとつは「主権」である。日本がライシテを法制化したのは戦後だが、当時占領下の日本に主権はなく、主権回復後も日本はアメリカの傘下に組み込まれた。これは日本の主権とライシテの自律性に関する問題を提起する。他方、主権は「静かな革命」以来ケベックの争点だったが、独立問題に代わり浮上したライシテ問題では、主権の問題は後景化している。次の論点は「右傾化」である。ライシテはケベックでもフランスでも右傾化しているが、日本でも同様である。戦後の政教分離訴訟は普通左派が原告だが、那覇孔子廟訴訟では右派の原告が宗教的マイノリティに政教分離の遵守を求めた。最後の論点は「平和」である。日本のライシテは平和主義と不可分だが、フランスでも政教分離法はコンブの戦闘的なライシテではなく、ブリアンの平和主義的なライシテに由来する。ケベックでも「静かな革命」期のライシテ化は大きな衝突もなく「静か」に進んだという。

三人の報告後は、会場との質疑応答が行われた。ケベックの「ポストコロニアルな想像力」が持つ功罪、コロナ禍以後の *L'autre Parole* の活動状況、ライシテの右傾化に対する日本の左派の反応など、さまざまな論点や質問がフロアから提出され、約 30 分が短すぎるように感じられるほど充実した質疑応答だった。本シンポジウムでは、interculturalisme、フェミニズム、日仏比較という三者三様の論点から、現代ケベックを考えるうえでライシテというテ

ーマが持つ広がりとお行きを十分に示すことができたように思われる。



(左上から時計回り) 司会の田中会員、飯笹会員、矢内会員、伊達会員
(下の写真) 質疑応答の様子





2024 年度 小畑ケベック研究奨励賞授与式における
コルベイク副会長と受賞者の羽生会員



閉会式後の集合写真

●編集後記●

毎年恒例となっている大会特集号をお送りします。冒頭から恐縮ですが、この場をお借りして、本 NL の刊行が大幅に遅れてしまい、ご執筆者の皆様、ならびに会員の皆様には、心よりお詫び申し上げます。

例年の大会と同様に、今回の大会においても、それぞれのセッションでは、他領域に渡る、知的刺激に富んだご講演・ご発表が行われました。ケベック研究のさらなる拡がりを感じさせるものであったと感じております。また、モンリオールと姉妹都市の関係を結んでいる広島において全国大会を開催できたことも、とても印象深く思っております。今回のニュースレターをお読みになり、少しでも当日の雰囲気をお伝えできたならば幸いです。

来年度以降の NL に関しましては、担当者の変更もありますが、従来通りの日程での刊行を実現できるよう心がける所存です。引き続き、ご指導ご鞭撻のほど、よろしくお願いいたします。(IH)

AJEQ ニュースレター

年 2 回発行 (予定)

発行人：丹羽 卓 編集人：廣松 勲